

# 館長寄稿

日々のつぶやき

## パリ出張散歩

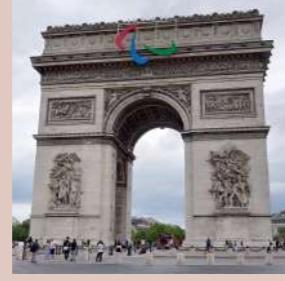
当館の石元泰博コレクションが出品協力をする展覧会が二つも開催中なら行くしかあるまいと、五輪開幕まで1か月弱となったパリを駆け足で訪れた。アンスティチュ・フランセ(東京日仏学院)の招聘で現代美術の調査に来て以来10年ぶりである。公務の隙間を縫い、ポンピドゥー・センターで話題の「コンスタンティン・ブランクーシ展」の最終日に駆け込むことができた。東京・アーティゾン美術館が今年開いたブランクーシ展も良かったが、さすがにその印象も震むまさであり、質量ともにフランス国立近代美術館の面目躍如。また、隣接する展示室で開催の「Bande dessinée(バンド・デシネ=漫画)1964-2024」展も見応えがあった。日本の漫画雑誌『ガロ』が並ぶなど、国際的なコミック文化をややアングラよりの視線でまとめた企画展であった。

パリではセーヌ河畔の巨大な現代美術センター、パレ・ド・トーキョーの企画も見落とせない。今世紀になってヨーロッパでは、アフリカや中東にルーツを持つ現代美術作家への注目度が上がっている。今回もアルジェリア出身のフランス作家モハメド・ブルオイサ(Mohamed Bourouissa)や、ガザ地区ゆかりのアートコレクティブ=作家集団『hawaf』(アラビア語で《刃》を意味するそうだ)などの大規模なインスタレーションが展示されていた。日本ではまだ紹介される機会の少ない地域のアーティストによる表現に触れ、いろいろと考えさせられた。

文・安田篤生(当館館長)



改修の仮囲いが目立つ  
ポンピドゥー・センター正面



パリオリンピックの機運高まる凱旋門



パレ・ド・トーキョーの玄関



空港ターミナル



本場のクロックムッシュ

### Q. どんなお仕事をしていますか?

美術館ホールの舞台・照明・音響設備の管理や操作を行っています。ホールでの催事が安全に滞りなく実施できるように、主催事業や貸館の一般利用者さまとの事前打合せから当日の準備、本番終了までをサポートしています。

### Q. 仕事で印象的だった出来事は?

2013年の当館主催事業『ONE DAY, MAYBE いつか、きっと』です。ホールのみならず展示棟・中庭・池など館の敷地全体を使った公演でした。公演日数が8日間と長く、開演は19時と22時。毎日、閉館後にプリセットし、本番中は次のシーンの準備にあちこちに移動する…といった普段の舞台上作品とは異なるものでした。

美術館の  
ここが  
オススメ!

ホールの音の響きが良いと、多くの方に言っていただきます。  
全国的には珍しい、可動式の能楽堂があります。

第4回 (株)コールさん(美術館ホール管理担当)



音響設備を操作する堅田優子さん



能楽堂で皿鉢料理を囲むシーンもありました  
©Taisuke TSURUI

### NEWS 2025年1月6日～2月7日 2階展示室休室

地球温暖化に対し、国策として白熱灯や蛍光灯のLED転化が推進されています。当館でも平成31年に行った吊天井改修工事に併せ、展示室C、D及び県民ギャラリーの照明設備をLEDに切り替えていましたが、この度、残っていた展示室A及びBの照明も工事を行うことになりました。工期の前後の展覧会の展示準備期間を含め、1月6日から2月7日までの1か月間、2階の展示室はすべて休室となり、アート情報コーナー含め2階を閉鎖いたします。ご迷惑をおかけしますが、ご理解・ご協力をお願いいたします。なお、1階の展示室Dは上記期間も開室します。 文・奥野克仁(当館学芸課長)

高知県立美術館  
THE MUSEUM OF ART, KOCHI

〒781-8123 高知市高須353-2 Tel.088-866-8000 Fax.088-866-8008 moak.jp

発行:高知県立美術館 編集担当:茂木恵美子(当館主任学芸員)、松本千鶴(当館企画事業課主幹)

発行日:2024(令和6)年1月3日 デザイン:FULL DESIGN

THE MUSEUM OF ART, KOCHI

# KENBI LETTER

高知県立美術館通信 ケンビレター

No.122



### 河田小龍《玄宗皇帝楊貴妃並笛図》

1861(文久元)年／絹本着色／134.0×72.0cm／高知県立美術館寄託

仲睦まじく寄り添いながら共にひとつの笛を奏でるのは、唐の玄宗皇帝とその妻、楊貴妃。この主題は一般に「並笛図」と称され、日本では桃山時代から狩野派に作例があり、幕末期には浮世絵や円山四条派などの諸流派で描かれました。作者の河田小龍は京都で狩野派を本格的に学んだ土佐の絵師。玄宗皇帝と楊貴妃の背後に画面の山水図を描く狩野派で描き継がれる様式に則りながら、極彩色と細密描写によって絢爛豪華な作品に仕上げています。楊貴妃のまとう衣の表現などはまさに超絶技巧というべきもので、ぜひ実物を間近に見て、筆力の凄みを感じていただきたい作品です。本作は土佐の豪商「木屋」の三代目、竹村與右衛門の依頼によって制作されました。木屋の屋敷は、現在の高知市、「木屋橋」交差点のあたりにありました。「木屋」という名前が地名として残っていることからも、当時の有力な商人だったことがうかがえます。與右衛門は文政年間より長らく土佐画壇の支援者であった人物で、自らも絵師として南画家・楠瀬大枝に師事し「菜橋」と号しました。與右衛門はその最晩年に、若かりし頃の小龍と親しく交流し、数々の絵を注文しました。本作についても、小龍に対し自ら構図の指示をしたと伝えられています。與右衛門が小龍に依頼した数々の作品は現在も受け継がれており、幕末期において既に多彩な作風を描き分けていた小龍の技量を最もよく示しています。文・中谷有里(当館主任学芸員)

\*本作は「生誕200年 河田小龍」2024年1月9日～2025年1月5日にて展示予定です。

# 美術館のお仕事

地道な作業をコツコツ！

## 01 石元泰博コレクション、パリへ

本年6月から、当館所蔵作品による石元泰博のヨーロッパでは過去最大規模の個展がフランス・パリで開催されました。会場となったのは、18区にある写真や映像、メディアアートに特化したアートセンター「LE BAL(ル・バル)」。先端的な写真展を数多く手掛け、日本の戦後写真にもいち早く注目してきた共同ディレクターのディアンヌ・デュフォーさんが、今最も注目すべき写真家として、石元に白羽の矢を立てたのです。日本の戦後写真界に重要な足跡を残し、後の世代に多大な影響を与えた石元の視覚。ディアンヌさんは、その被写体との距離感や厳格な構成に、日本的な美意識である「間(マ)」の感覚がうかがえると語っています。ディアンヌさんが初めて高知にやってきたのは、かれこれ5年も前のこと。当初から「ヴィンテージプリント」を展示することに強くこだわり、当館の所蔵作品調査のため来高されたのでした。ヴィンテージプリントとは、撮影からほどなく制作された歴史的価値や希少性が高いとされるプリントのこと、当館は、石元のヴィンテージプリントを世界で最も多く所蔵しています。プリントの入った保存箱を開けるたび、「オーララ！(フランス語の感嘆詞)」と目を輝かせ、何百枚ものプリントを1枚ずつ、真剣に見定めていく姿が印象的でした。展覧会の準備はコロナ禍を挟んで進められ、出品作の選定や、作品情報の精査、マット装の手配、図録の編集・執筆、輸送条件の交渉、契約書の締結、などなど……数えきれないやり取りが交わされました。6月上旬には、美術品の輸送に随行し監督する「クーリエ」業務と、展示作業やオープニングへの立ち会いのため、パリへと渡り3週間ほど同地に滞在しました。コンサバターや学芸スタッフ総出による全169点の状態確認(コンディションチェック)に続き、設営途中での造作プランの変更、幾度にもわたる作品配置順の練り直しなど、よりよい展示となるよう、連日粘り強い作業が続きました。言語や文化の壁によって、準備期間には多くの困難がありましたが、皆が一様に、石元作品の良さを伝えたい、より良い展示にしたい、という強い思いを共有していることが、何よりのモチベーションになりました。満を持した内覧会には多くの人々が参加し、会場は超満員。こんなに面白い写真があったのか、と驚きをもって石元の作品世界に出会うパリジャン・パリジェンヌたちを間近に見届けることができました。今回の展覧会が実現したのは、遙れば、貴重なヴィンテージプリントを含むすべての作品を高知県に寄贈したいと望んだ石元氏の思いと、それに則り長い年月をかけて地道にアーカイブを整えて来た美術館の活動があったからこそ。石元コレクションの豊かさと唯一無二性を存分に發揮した今回の展覧会に立ち会うことができ、感無量でした。

文・朝倉芽生(当館学芸員)



会場入口。「ル・バル」はフランス語で舞踏会の意。元々ダンスホールだった建物をリノベーションしたことに由来している



展示会場。専属のデザイナーによる斬新な空間構成が、ル・バルの展覧会の見どころの一つ。「桂離宮」の展示空間には、襖や障子を彷彿させる展示壁が並び、石元写真の造形美と絶妙なコンビネーションをみせていた ©Marc Domage



内覧会にて。石元が初めて手掛けた写真集『ある日ある所』(1958年)を紹介するコーナーにも多くの方が熱心に見入っていた

展覧会

「Yasuhiro Ishimoto. Des lignes et des corps(石元泰博 線と身体)」

会期:2024年6月19日(水)–12月22日(日) \*好評につき会期が延長になりました  
会場:ル・バル(LE BAL)／6, Impasse de la Défense, 75018 Paris, France



ル・バル併設カフェの日替わりメニュー、カツオのタタキ。味付けはレーズン、付け合わせはインゲンというパリスタイル(?)

エッフェル塔の側にある「パリ日本文化会館」で開催された「丹下健三と隈研吾 東京大会の建築家たち」展。本展には、当館収蔵の石元泰博作品《桂離宮》や、《広島平和記念資料館本館》など、丹下健三の建築を被写体にした写真11点が出品され、展示作業の立ち会いのため、かの地を訪れました。本展では写真作品以外にも模型などの資料類も展示され、それらは船便での輸送となりました。しかしガザ地区の情勢悪化の影響を受け紅海が封鎖、エズズ河を避けた経路変更により到着が遅れ、思わずところて中東地域の緊張を感じました。一方、当館からの陸路を経て、東京から飛行機で14時間以上旅をしてきた写真作品は予定通りに到着。輸送箱を開梱後、作品1点ずつの状態確認から展示作業はスタートしました。作業は当館のそれとほぼ同じでしたが、ひとつだけ大きく違う点が。それは写真の展示位置が、当館の石元展示室での高さより10cm以上高かったことです。パリではこの高さが標準のよう、昨今、当館にも海外からのお客様も増えてきたことを考えると、作品の展示の高さも検討の余地があるのでと考えさせられる良い経験になりました。

文・天野圭悟(当館学芸課チーフ)

展覧会

「KENZÔ TANGE – KENGO KUMA Architectes des Jeux de Tokyo

(丹下健三と隈研吾 東京大会の建築家たち)」

会期:2024年5月2日(木)– 6月29日(土)

会場:パリ日本文化会館／101 bis Quai Jacques Chirac, 75015 Paris, France



作品専門の輸送箱



現地スタッフによる展示作業中

## 02 シャガール《村の祭り》、ウィーンへ

当館のシャガール・コレクションには油彩画が5点あります。そのうち最初期の作品である《村の祭り》が本年9月、ヨーロッパへ旅立ちました。オーストリア・ウィーンにあるアルベルティーナ美術館で開催される展覧会「Chagall」で展示するためです。アルベルティーナ美術館は女帝マリア・テレジアの娘婿アルベルト公のコレクションが核となった美術館で、デューラー、ミケランジェロ、ブリューゲルの素描を所蔵していることでも知られています。そんなハプスブルク家の歴史を持つ美術館に違い高知から作品を貸すことになるとは思ってもみないことでした。筆者は高知からトラックで国内を移動、ヨーロッパへ飛行機で飛び、さらにトラックでウィーンまで向きました。通常、9月のウィーンはカラッとした青空が広がる美しい季節のはずなのですが、到着してから展示作業の日までは「ボリス」と名付けられた暴風雨の影響で、大雨と強風が吹き荒れる日々でした。そんななか予定の変更はあったものの、滞りなく展示作業ができたのは、アルベルティーナ美術館と運送会社チームの協力の賜物だったと思います。9月28日、展覧会は無事開幕。会場では欧米各地の美術館、個人蔵のシャガール作品が一堂に会し、美しい空間をつくっています。当館の作品もたくさんの人の目に触れることを期待しています。

文・柳澤宏美(当館学芸員)

展覧会

「Chagall」

会期:2024年9月28日(土) – 2025年2月9日(日)

会場:アルベルティーナ美術館(ALBERTINA)／Albertinaplatz 1 1010 Wien, Austria



ウィーン料理の代表、シュニッツェル



朝食はオーストリアの定番パン・カイザーゼンメル



日本からオーストリアへの長距離移動を経た作品に異常がないか展示前にチェックしました



アルベルティーナ美術館外観。展示作業の翌日、やっと晴れました。騎馬像はアルベルト公

## 03 額のメンテナンスを行いました

藤田嗣治の油彩画《貝殻のある静物》は、当館の所蔵作品のなかでも屈指の人気作です。しかし、最近では額の経年劣化が進み、外枠部分の石膏地の欠けやひび割れが目立つようになりました。また、作品保護のために外枠に嵌められたアクリル板が反射して、藤田作品に特有の乳白色の美しい絵肌が視認しづらくなっていることも気がかりでした。そこで修復家に依頼し、額の外枠部分の修復と、光の反射が少ない低反射アクリル板への交換を行いました。修復した額に作品を入れてみると、画面は以前よりも明らかにクリアに見えます。さすが、xx万円のアクリル板……！(※低反射アクリル板は大変高額です)見る角度によっては、まるでアクリル板が存在しないかのようにすら感じるほど、藤田の繊細な筆致をはっきりと捉えられるようになりました。次回の作品展示の際には、貝殻をはじめとした愛らしいモチーフとあわせて、修復によって美観と機能を取り戻した額も、すみずみまでご覧ください。

文:塚本麻莉(当館主任学芸員)



額のメンテナンス風景

## Exhibition Report - 01

イッタラ展  
フィンランドガラスのきらめき

2022年から巡回が始まり、当館から館目の会場となつた本展は、フィンランドガラスの歴史とデザインを、道具類やメイキング映像を交え、製造工程まで紹介する「ガラス好きにはまらない展覧会でした。来場者の中には、イッタラガラス工場に行ったことのある方や、イッタラ製品の愛用者もみられ、ギャラリートークには、たくさんの方々に来場いただきました。また、関連イベントとして、アルヴァ・アルトのドキュメンタリー映画「アーレル」の上映会を行いました。

ガラス工場に行つたことのある方や、イッタラの最初の妻、アルヴァの夫、アイノとの関係性を知ることができる内容で、作品のイメージとは異なる名匠の少々狡い(?)素顔を垣間見ることができます。当日のホワイトエヌは高知市内のカフェ・マルマッツァに出店をお願いし、来場者はフィンランドのスイーツを堪能いただきました。

私事で恐縮ですが、学生時代に吹きガラスにハマり、職人を夢見ていた筆者にとって、本展は数々の名品に触れる機会となり、思い出深い貴重な体験をさせていただきました。

文・長山美緒(当館主任学芸員)



## 展覧会

「イッタラ展 フィンランドガラスのきらめき」

会期: 2024年4月14日[日] ~ 6月16日[日]

会場: 当館展示室B、C

## Exhibition Report - 02

少女たち  
—夢と希望・そのはざまで—

星野画廊コレクションより



島崎路二(朝) 1934年 キャンバスに油彩

文・奥野克仁(当館学芸課長)

## 展覧会

「少女たち一夢と希望・そのはざまで」星野画廊コレクションより

会期: 2024年7月6日[土] ~ 9月22日[日・祝] 会場: 当館展示室B、C

コレクション・テーマ展「写真の冒険」の関連企画として、千葉大学准教授で建築史家の豊川斎赫氏による講演を行いました。豊川先生は、日本を代表する建築家・丹下健三に関する著作や展覧会企画を多数手掛けられてきた丹下研究のエキスパート。丹下と石元、二人の巨匠が手掛けた主要な仕事や関係性について、緻密な調査研究に基づきつつも、軽快な語り口でお話いただきました。その一部を抜粋してご紹介します。

文・朝倉芽生(当館学芸員)

講演で紹介された石元と丹下健三のスナップ写真。  
内田道子アートカブ観、1955年に東京のエドワード・スタイルンも羽田にて見送る丹下と石元、彼らの仲睦まじい関係性が伝わってきます。

「丹下自邸CG」上映イメージ(提供:TOPPAN株式会社)

展覧会「高知県立美術館 コレクション・テーマ展 写真的冒険  
シカゴの写真家たちを中心に 石元泰博コレクションより

+《特別上映》丹下健三「自邸」再現CG

会期: 2024年4月10日[水] ~ 7月10日[水] 会場: 当館展示室D

トークイベント「丹下健三と石元泰博」

2024年5月11日[土] 14:00 ~ 15:30 当館講義室

## MUSEUM HALL INFO

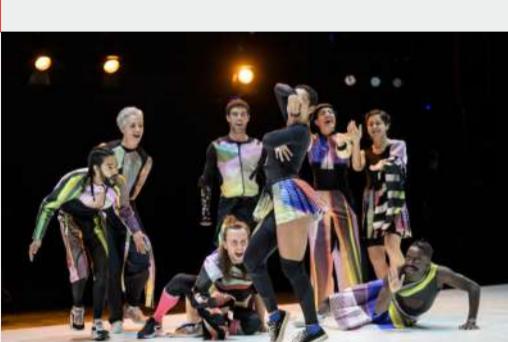
美術館ホール事業紹介

今年度下半期も、渾身のホール事業が目白押し!  
気になるそのラインアップをご紹介します。

## LINEUP 01

## マルコ・ダ・シウヴァ・フェレイラ『CARÇACA』 日時: 2024年11月20日[水] 19:00(開場18:30)

◎前売料金: 一般4,000円 30歳以下3,000円(U30) 18歳以下2,000円(U18) \*12歳以上推奨、未就学児不可



© José Caldeira

この秋、ポルトガルより世界のダンスシーンが注目する新鋭振付家、マルコ・ダ・シウヴァ・フェレイラによる最新作を京都と高知で日本初上演します。出演するフェレイラが集めた10名のダンサーは多彩なバックグラウンドの持ち主ばかり。ストリート発祥のヒップホップ、ブレイキン、そしてハウステンやボーグ、速いステップが特徴のアングラ発のクドゥル、またDJとしても活躍するダンサーもいます。音楽へのこだわりでも秀逸さをみせ、フェレイラ自身がファンである打楽器と電子音楽の2人の音楽家に『カルカサ』のライブ演奏を依頼し、今作での共演が実現したそうです。当館ウェブサイトでは、本作の創作背景を深掘りした舞踊評論家の岡見さえさんによる公式インタビューを掲載中です。公演に合わせてぜひご一読ください! 文・松本千鶴(当館企画事業課主幹)

## LINEUP 02

## 1927『ROOTS』 日時: 2025年1月18日[土]・19日[日] (17日[金] プレビュー回あり)

◎前売料金: 一般4,000円 30歳以下3,000円(U30) 18歳以下1,000円(U18) \*未就学児不可

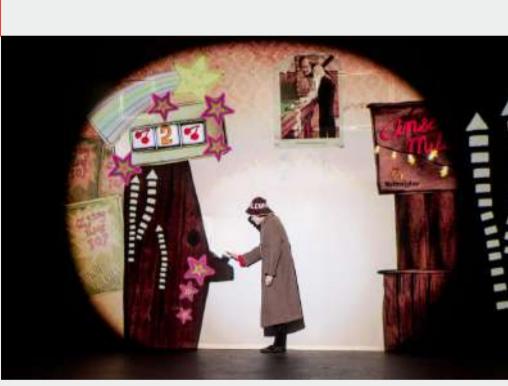


Photo: Leigh Webber

数字「1927」が気になった方も多いのではないでしょうか。これはイギリス南東部の海辺の町マーチートを拠点に活動する劇団名で、初めて音声が付いたトーキー長編映画『ジャズ・シンガー』の誕生へのリスペクトを込めて命名したそうです。1927年の最大の特徴は、俳優と音楽家によるパフォーマンスと手書きのアニメーション映画が融合した不思議なライブ感。共同主宰のボール・パリットさんがアニメーション制作(なんと独学!)、スザンヌ・アンドレードさんが創作兼演出を担い、協同する音楽家、俳優たちとスタジオで何度も実験を重ねて1927年の演劇スタイルを育んできました。『ROOTS』は欧州各地に点在していたために語られることがない素朴な物語のメドレーです。高知のみで日本初演を迎えるダークでウィットに富んだ、子供も楽しめる大人のための演劇×アニメーションの世界を劇場で堪能ください。文・松本千鶴(当館企画事業課主幹)

## LINEUP 03

## contact Gonzo × dot architects'『the storm』 日時: 2025年2月22日[土] 19:00(開場18:30)

◎前売料金: 一般2,000円 中学・高校生1,500円 小学生500円 \*未就学児無料

◎出演: contact Gonzo, dot architects ◎トーク登壇: 松嶋健(人類学者・広島大学教授)



Photo: 萩原理江子

\*各公演の当日券は、各料金に500円増。年齢等に則ったチケットのご購入者は、公演当日に証明書をご持参ください。\*内容に変更が生じる場合がございます。詳しくは当館ウェブサイトをご確認ください。

## MUSEUM HALL REPORT

美術館ホール報告

## 劇場アートマネジメントセミナーを開催しました!

今回実施したのは、劇場をはじめとする文化施設で働く人たちに向けたセミナー。仕事をしていくうえでの困りごとや悩みは、どの仕事にもつきものですが、劇場職員にも仕事ならではの悩みが生じがちです。その切り口として、「評価検証」「労働環境」を設定し、それぞれのテーマの第一人者を講師にお迎えしました。文・福島尚子(当館企画事業課チーフ)

## 1 評価検証編

講師: 大澤寅雄氏・合同会社文化コモンズ研究所

開催のテーマは評価。文化芸術の現場でも、企業や省庁と同じように、事業や会館運営の実施状況を検証し、改善計画を作ることが求められます。とはいえ、改善の仕組みづくりは業務のボリュームがそれなりに大きいもの。「やっていくけど途中で頓挫してしまったことがある」「どのような手法で行うのがいい?」などお悩みや疑問をみんなで持ち寄り、大澤寅雄さんに先行事例を紹介いただきながら、考え方の道筋をつけていきました。2回目の講座は今冬実施予定です。

## 2 労働環境編

講師: 吉澤弥生氏・共立女子大学文芸学部教授

劇場では様々な雇用形態の人たちが運営に参加しています。異なる立場で働く人たちが、どのようなところで不安や不利益を感じているのか? 全国の文化芸術の現場で起きている長時間労働やサービス残業、ハラスメントの実例を、吉澤弥生さんに紹介していただいたところ、「私もそんな経験がある!」という声も! 参加者の皆さんが今まで何となく抱えてきたモヤモヤを共有する機会を持ったことで、問題点を認識し、改善へ繋げる道すじを検討する機会となりました。

(ユリヲミル)  
2024年ドローイング参考作品: (並行する昨日/シロイ夜) 2020年  
植物などを被写体に、重層的に編集された映像作品に長年取り組まれている

拠点とする滋賀県大津市の自宅兼アトリエ。比叡山の麓に位置し、庭先まで鹿がやってくることもあります



参加者と講師の活発な議論が展開されました

## 劇場アートマネジメントセミナー

## ①評価検証編

2024年6月17日[月] 13:30 ~ 17:00 当館講義室

※12月5日[木]に2回目を開催

## ②労働環境編

2024年6月24日[月] 14:00 ~ 17:00 当館講義室